小学校四年の部　佳作　――　対象作品／沢田俊子著『ぼく、がんばったんだよ～筋ジストロフィーの少年の旅～』汐文社

筋ジスは和馬君のトロフィーだ

弘前大学教育学部附属小学校　泉　愛菜

「よくがんばったね。愛菜さんの心ぞうはとても元気に動いているから心配ないよ。」

長い長いせいみつ検査が終わった時、お医者さんがにっこりと笑って、ゆっくりやさしく言いました。

それを聞いたお母さんは、目を大きく開いて、少し涙を浮かべていました。

体の中で、風船みたいに大きくふくらんだ「怖い」という気持ちと、「きんちょう」の気持ちが「ぱんっ」と音を立てて割れたような感じがして、頭の中が真っ白になりました。その後やっと安心した気持ちになりました。

私は、筋ジストロフィーという病気になった和馬君という男の子が、電車の沿線を旅する、本当にあった物語を読みました。

私は、和馬君の旅を応えんしながら、いつの間にか、自分が心ぞうの病気の検査を受けた時のことを思い出して、和馬君と一緒に旅をしている気持ちになっていました。私にも和馬君の気持ちがよく分かるからです。

私が学校からお手紙をもらった時。お父さんとお母さんが「検査」とか「手じゅつ」の言葉を不安そうに話していた時。お母さんから「病院に行くよ。」と言われた時。

そのしゅん間ごとに、私の不安な気持ちと怖いという気持ちは、どんどん大きくなって

「うそだといいな。夢だといいな。夢が覚めたら元どおり。」と毎日神様に祈っていました。

でも、私はお母さんを心配させたくなかったから、病院に行くと言われた時、

「ああ、心ぞうの検査でしょ。分かった。」

とわざと明るく答えたことを、今でもはっきりと覚えています。

検査をしている間、私は色んなことを考えていました。

「手じゅつはいたいのかな。」「入院したら、夜も一人ぼっちかな。」「学校をお休みしたら勉強が分からなくなるかも。」

「もしかしたら死んじゃうのかな。」
頭の中は、不安と心配でいっぱいでした。
でも検査の後、お医者さんの一言で、元気で健康な私に戻(もど)ることができました。
私とちがって、和馬君はお医者さんに、
「筋ジストロフィーですよ。」
と言われてしまったから、私は、胸(むね)がしめつけられるように悲しくなりました。
私には、和馬君のことが自分のことのように思えてしまうのです。
でも、写真の和馬君は、まるで病気なんかにかかっていないような元気な笑顔でした。
「病気は治ってほしいけど、筋ジスはぼくのトロフィーです。」
和馬君が作文で書いたこの文章が、私は大好きです。
ゆうしゅうなお医者さんが、和馬君の病気を治してくれることを信じています。